

# 民族性を脱したトルコ系移民のドイツ語<sup>1)</sup>

その認知過程における言語学者とメディアの役割をめぐって

田中 翔太

## 1. 「トルコ系移民のドイツ語」研究の出発点

1950年半ば以降、トルコ、スペイン、イタリア、ギリシャなどから多くの外国人労働者がドイツ連邦共和国へ渡ってきた。これらさまざまな民族背景を持つ移民の第一世代が話すドイツ語は、ひとまとめにして *Gastarbeiterdeutsch*「外国人労働者のドイツ語」という名称で呼ばれた。その後、特にトルコ系移民が話すドイツ語に关心が集まり、1970年代から現在（2011年10月現在）に至るまでに、「トルコ系移民のドイツ語」を指す用語が数多く提案してきた。例えば、既に1980年代から使用されている *Türkendeutsch*「トルコ人のドイツ語」という名称の他に、Zaimoglu (1995)による *Kanak Sprak*「カナーケの言葉」<sup>2)</sup> や Kallmeyer/Keim (2003)による *Stadtteil-Sprache*「都市地区のことば」、Auer (2003)の *Türkenslang*「トルコ人のスラング」や Wiese (2006)による *Kiezdeutsch* (*Kiez-Sprache*)「地区のドイツ語（地区のことば）」等を挙げることができる。「トルコ系移民のドイツ語」が「越境」してドイツ人のドイツ語話者に入つて行ったこととも関連して、<sup>3)</sup> これらの名称はそれぞれ指す対象、内容、範囲が多かれ少なかれ相違している。そのため、新聞やテレビ等のメディアで「トルコ系移民のドイツ語」が取り上げられる際に、用語と概念が混乱して使用されることが少なくない。

本論文は、現在のところメディアで特に頻繁に使用される *Kanak Sprak* と *Kiezdeutsch* という用語に注目しながら、「トルコ系移民のドイツ語」がドイツ社会で評価・認知・受容されるプロセスにおいて、用語の定義づけを行う言語学者

1) 本論文は、2011年10月15日に金沢大学で行われた日本独文学会秋季発表会で筆者がおこなった口頭発表「民族性を脱したトルコ系移民のドイツ語—その認知過程における言語学者の役割をめぐって」に基づき、加筆修正を加えたものである。

2) *Kanak Sprak* の日本語訳については、浜崎(2005)を参照。

3) このプロセスについては、田中(2011)を参照。

たちとその用語を広く普及させるメディアが果たした役割について考察を行うものである。

## 2. Kanak Sprak とその様式化<sup>4)</sup>

Kanak Sprak とは、トルコ系移民の出自を持つ作家である Feridun Zaimoglu が 1995 年に „Kanak Sprak: 24 Mißtöne vom Rande der Gesellschaft“ (『カナーケの言葉：社会の周縁の 24 の雑音』) のなかで定義づけた名称である。Kanake「カナーケ」は、ネガティブなコノテーションをもってとりわけトルコ人労働者を指す際に用いられる語である（およそ「無知なよそ者野郎」くらいの意味である）。しかし、Zaimoglu (1995) はこの語を意図的に用い Kanak Sprak「カナーケの言葉」と名づけ、「USA での黒人意識運動 (Black-consciousness-Bewegung) と同様に、個々の Kanak の下位アイデンティティがより一層決定的に、絆と意義を自覚する」 (Zaimoglu 1995: 17 頁) ことを目指した。<sup>5)</sup> 実際に、この本の出版年を契機として、ドイツ社会におけるトルコ系移民のイメージがポジティブな方向に変化した。それ以前のトルコ系移民についてのイメージは、Günter Wallraff が „Ganz Unten“ (1985) を執筆する際に扮装したトルコ人労働者 Ali に付随するもので、「シンプルで教養がなく、しかし労働力として搾取され、ドイツ人からトルコ人であるとして除け者にされる工場の品行方正で清廉潔白な重労働者」 (Dirim/Auer 2004: 4 頁) というものであった。この「トルコ系移民」という語から連想される「犠牲者役割 (Opferrolle)」 (Zaimoglu 1995: 12 頁) としてのイメージを転換する要因のひとつとなったのが、Zaimoglu (1995) であったのだ。2000 年代に入ると、Hip Hop や Rap においてトルコ系移民のドイツ語が歌詞に使用され、そのことを通じてこのことばは特定のドイツ人グループによって cool なものであるとして評価される

4) 「様式化することは、自身あるいは架空の人物をある社会カテゴリーの一員として紹介すること。そしてその目的のために特定の言語的、また他の記号的手段を使用すること」 (Androutsopoulos 2001: 322 頁) である。

5) Zaimoglu はアメリカの黒人意識運動に影響を受けており、アメリカ英語の *nigger*「《俗》黒んぼ《◆Negro》よりひどく軽蔑的；ただし黒人同士が用いる場合は親近感を表す」(ジーニアス英和辞典 2002: 1259 頁) のように、Kanake という罵りことばがポジティブな自己標識に転換することを望んでいる。ドイツのメディアにおいては 1990 年代半ばを契機に、アメリカやイギリスで移民を題材に製作された番組を参考に、リメイクという形でトルコ系を題材とした番組を制作、放映している。

こととなった。<sup>6)</sup>

ドイツにおけるメディアは、Zaimoglu (1995)に対して「好奇心に満ちた反応をし」(Dirim/Auer 2004: 6 頁)、「トルコ系移民のドイツ語」が Kanak Sprak という名称とともに大きく報道された。その結果、ドイツ社会において Kanak Sprak が「トルコ系移民のドイツ語」全体を表す名称であるかのような錯覚を起させたと考えられる。さらにはコメディアンたちが TV メディアにおいて Kanak Sprak という名のもとに「トルコ系移民のドイツ語」を使用し、トルコ系移民たちの姿を面白おかしく描いたことから、あたかもコメディアンが用いるブロークンなドイツ語が「トルコ系移民のドイツ語」であるかのような、ネガティブなステレオタイプ化がなされたのである。<sup>7)</sup> そして TV メディアにおける Kanak Sprak は、本来 Zaimoglu (1995) が指した Kanak Sprak から離れていくことになった。

さて実際に、Zaimoglu (1995) で Kanak Sprak として提示されたものと、メディアで Kanak Sprak であるとして提示されたものの言語的特徴を比較することで、どのような点において「様式化」がなされ、言語的に変化しているのかを明らかにしていきたい。まず Zaimoglu (1995) が Kanak Sprak として示したことばを、次の引用文(1)、(2)で示した。

- (1) Pop is ne fatale orgie, ein ding ohne höhre weihen, und es macht aus jeder göre  
aus'm vorort'n verdammt zappler und aus jedem zappler ne runde null.  
(Zaimoglu 1995: 19 頁)<sup>8)</sup>

(1) ポップってのは破滅的な饗宴で、それより甚だしい厳肅さがないもの、

6) Kanak Sprak について詳しくは、田中(2011)を参照のこと。Hip Hop や Rap の世界で使用されている「トルコ系移民のドイツ語」を日常生活において用いることで、ギャングスターのような力ある者としてのイメージを創出することができるという指摘がある(Byrd 2009: 76 頁を参照)。

7) この様式化の原因のひとつとして Auer (2003) は、ドイツ人の Lars Niedereichholz (1968 年生まれ) と Ande Werner (1968 年生まれ) からなるコメディ・デュオ、Mundstuhl がコメディ番組において、代名詞としての *das* を指示代名詞として使用するケース以外において一貫して *den* と言う点を挙げ、彼らが、Kanak Sprak という名のもとに「トルコ系移民のドイツ語」の様式化を行ったとしている (Auer 2003: 261 頁を参照)。また同じく、ドイツ人の John Friedmann (1971 年生まれ) と Florian Simbeck (1971 年生まれ) からなるコメディ・デュオ Erkan und Stefan は、「例えば価値づけや強調の意味として、*brutal* と *frontal* からなる *brontal* といったような特殊な表現をつくり出した」(Androutsopoulos 2001: 329 頁)。

8) 引用文中の下線は筆者の田中が示したものである。以下同様。

町はずれのどのガキもひどく落ち着かない奴にして、どんな落ち着かない奴もゼロラウンドにする。

この引用文(1)は、ラッパー Abdurrahman (24歳) の会話記録からである。Zaimoglu (1995) は Kanak Sprak の特徴を、「Kanak Sprak の自由さは、句読点が全くつかず、絞り出されるように、せわしなく、そして混成したどもり話から成り立っている」 (Zaimoglu 1995: 13 頁) としている。引用文(1)からも観察されるように、確かにひとつの文が切れ目なく続いている印象を受ける。Zaimoglu (1995) ではトルコ系移民の第二世代に該当する 24人の会話を集めているが、この引用文(1)に見られる話し方はひとりに限定したものではなく、全ての会話記録において同様の書き方がなされている。次の引用文(2)は、職業がポン引きという Cem (25歳) の会話記録からである。

- (2) Morgens also, noch im frühen, seh ich mich ins laken verwickelt, das weiße zeugs, als hätt ich's auswringen wollen, liegt da orntlich verkrümmt wie'n bloßer darm, und ich mach, daß ich ins trauen komm und's aufrichten und überhaupt. (Zaimoglu 1995: 49 頁)
- (2) 每朝つまり、まだ早い時、自分がシーツにからまっているのを見て、その白いもの、まるで俺がそれ絞りたいみたいに、そこにむき出しの腸みたくソウロウ（相当）に曲がって横たわってて、俺はするんだ、あえてして、それ立てて、まったく。

ここで引用した箇所も、全体で一文となっている。この引用文(2)からも、いかに Zaimoglu (1995) が示した Kanak Sprak の話者たちの会話が、長いターンから成っているかが分かる。さらに(2)の例では、2行目の *ordentlich* 「相當に」が *orntlich* と発音されるなど、音声面でも Kanak Sprak の言語的特徴を見る事ができる。そして(1)と(2)の引用文に共通している特徴として、(1)の *aus'm* や *vorort'n*、そして(2)の *ich's*、*wie'n*、*und's* のように、定冠詞、または指示代名詞が前置する語と縮約されて発音されたり、(1)の *is* や *ne*、(2)の *seh* や *hätt*、*mach* や *komm* のように音が脱落したりすることを挙げることができる（それぞれ標準ドイツ語では

*ist、eine、hätte、mache、そして komme となる)。*

次に例として示すのは、ドイツ人の作家 Michael Freidank による „Wem is dem geilste Tuss in Land?: Märchen auf Kanakisch un so“ (2001)からの引用文である。コメディにおいて様式化が進んだ Kanak Sprak は、さらに印刷メディアにも広まつていった。Freidank (2001)は Kanakisch 「カナーケ語」でグリム童話を書くという試みを行い、<sup>9)</sup>『カナーケ語 (Kanakisch)』の語彙を用いて注目を集め、ドイツの伝統的文化財の異化 (Verfremdungen) は、なかでもビルト紙で活字化された (Androutsopoulos 2011: 95 頁)。

(3) Dem Muttern hat dem so genannt, [...] (Freidank 2001: 41 頁)

= Die Mutter hat sie so genannt, [...]

(母親は彼女をそう名付け、[...])

(4) Dem war eim alte Mann, dem hat Eseln gehabt, [...] (同: 53 頁)

= Das war ein alter Mann, der Eseln gehabt hat, [...]

(昔々あるところに、ロバを飼った年老いた男性がいました、[...])

(5) Dann hat dem andere Typ dem Typ so dem Fresse reingehaut, [...] (同: 51 頁)

= Dann hat der andere Typ den Typ so in die Fresse reingehaut, [...]

(そうすると他の男が、その男の面に一発喰らわしました、[...])

Zaimoglu (1995) が Kanak Sprak として紹介した文の一例と、Freidank (2001) が Kanak Sprak として記述した引用文を比較すると、その違いが一目瞭然である。Zaimoglu (1995) では(1)の 1 行目にある *ein ding* 「あるもの」、また(2)の 1-2 行目の *das weiße zeugs* 「白いがらくた」などの例のように、きちんと名詞の性の選択、格変化、そしてそれに伴う形容詞の語尾変化がなされている。しかし Freidank (2001) では、これがなされていないのである。Zaimoglu (1995)において、本来大文字で書かれるべき語が小文字で書かれている点は、Zaimoglu (1995) がこの著書を書くに際して「記録 (Protokolle)」(Zaimoglu 1995: 15 頁) という形式をとっていること、つまりインタビュー形式で行った会話を Zaimoglu が自ら活字化しているという点から、意図的にそう記したとも考えられるため、Kanak Sprak の言語的

9) この点については、田中 (2011: 38 頁) を参照。

特徴と言い切ることはできない。

Freidank (2001)の引用文をもう少し見ていこう。まず名詞の性の選択に関しては、(3)の例を見ると分かるように、女性名詞であるはずの *Mutter*「母」が男性名詞の三格で記されている。また(4)の出だし部、*dem war [...]*、そして従属文の<...>, *dem hat [...]*の例や(5)の女性名詞 *Fresse*「顔」もそうであるが、Freidank (2001)による「カナーク語」のグリム童話では、全ての名詞が男性あるいは中性名詞の三格で統一して書かれている。さらに Freidank (2001)では、(4)の、*eim alte Mann* 「ある年老いた男」、そして(5)の例で示した *dem andere Typ*「他の男」のように、形容詞の語尾変化も正しくなされていない。この点においても Zaimoglu (1995) で提示されている Kanak Sprak が、コメディを経由し印刷メディアに至るまでの間に、いかに言語面において様式化されているかを見ることができる。

### 3. Kiezdeutsch という新しい概念の提唱

#### 3.1. Kiezdeutsch の定義

2006 年に Potsdam 大学の Heike Wiese は、„Ich mach dich Messer“: Grammatische Produktivität in Kiez-Sprache („Kanak Sprak“)“ という論文を発表し、Kiezdeutsch (Kiez-Sprache)<sup>10)</sup> という概念を提唱した。この論文タイトル中に Kiez-Sprache („Kanak Sprak“) があるので、第 2 章で論じた Zaimoglu (1995) の Kanak Sprak との Wiese (2006) による Kiezdeutsch があたかも同一の対象物を指す概念であるかのような錯覚を起こさせるが、著者である Wiese は、この二つの概念は違うものであると明言している。既に第 2 章で述べたように、Kanak Sprak はメディアにおいて言語的な様式化がなされてしまい、Wiese が研究対象とする実地調査に基づいた Kiezdeutsch とは必ずしも言語的特徴が一致しないからである (Wiese 2006: 248 頁ほか参照)。

しかし、Kiezdeutsch が論文で提唱された 2006 年以降、この用語がメディア（新聞や雑誌、インターネット記事）において度々取り上げられ、ドイツ社会に広まっていく過程の中で、Wiese (2006) が論文で提唱した定義、また評価から後々逸

10) Wiese が唱えたこの概念については、論文やメディア報道において Kiez-Sprache、Kiezdeutsch という二つの用語が使用されているが、Wiese 自らが開設したこのことばに関するウェブサイトにて Kiezdeutsch という用語が統一的に用いられている点から、本論文でも、引用部以外は Kiezdeutsch で統一することにする。

脱していくということが起こった。その経緯の発端となったであろう Wiese の Kiezdeutsch に対する定義、また与えた評価について見ていく。

まずこの Kiezdeutsch の *Kiez* とは、いったい何を表わす語なのだろうか。小学館の『独和大辞典』(1998) を引くと、ひとつめの意味として「((東部)) (町の)一地区」(独和大辞典 1998: 1261 頁) が出てくる。„DUDEN“ (1999)によるとさらに、「(北東部、とりわけベルリン) 都市のー地区、(人里離れた) 場所」(DUDEN 1999: 2108 頁) とある。もともと Wiese がこの研究を Berlin の多民族が生活する住宅地区 (Kreuzberg、Neukölln-Nord、Wedding、Schöneberg-Nord) で始めた点を考慮に入れると納得のいく意味である。ただしこの語にはもうひとつの意味があり、それは話すことばのレベルにおいて「((話)) (いかがわしい) 地域、売春地帯」(独和大辞典 1998: 1261 頁)、具体的には「(話) 売春街、遊興街、歓楽街」(DUDEN 1999: 2108 頁) として使用される。ここで想起されるのは、Kanak Sprak という概念が、文学者の Zaimoglu (1995)により意図的にネガティブな語を用いて命名されたのと同様に、Kiezdeutsch という概念も、言語学者である Wiese (2006) によってネガティブな意味を内包する語を使用し提唱されたという点である。

*Kiez* という語を用い、Wiese (2006)はこのことばを次のように定義づけた。Kiezdeutsch は、「移民が多い都市の住宅地区で形成された若者ことばの変種」(Wiese 2006: 247 頁) であり、「第二言語習得、民族方言、若者ことばと関連を持つ」(Wiese 2006: 246 頁)。

### 3.2. Kiezdeutsch を構成する言語的要素

次に、Wiese (2006)で示された Kiezdeutsch の言語構成要素のモデルをもとに、Wiese (2006)が提唱する Kiezdeutsch の中身を見ていく。

図 1 : Kiezdeutsch の言語構成要素モデル (Wiese 2006: 251 頁をもとに一部加筆)

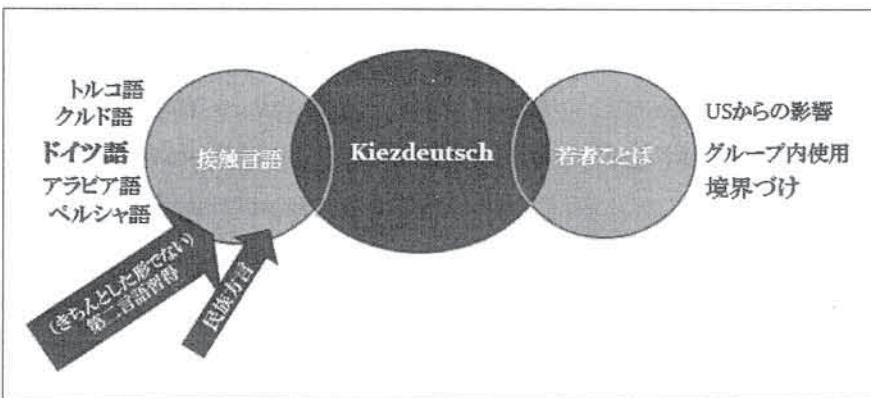


図 1 を見るとまず、中央にある Kiezdeutsch の両脇に、この Kiezdeutsch を構成する要素である「若者ことば (Jugendsprache)」と「接触言語 (Kontaktsprache)」が重なっている。さらに「若者ことば」と「接触言語」を取り巻く背景要素がそれぞれにあり、例えば「若者ことば」の背景要素として、「US からの影響 (US-Einflüsse)」があることを示している。これについて Wiese (2006) は、「Kiezdeutsch の話者により「アメリカ英語の表現や言い回しが借用されている」(Wiese 2006: 251 頁) と主張している。次に「グループ内使用 (In-group-Verwendung)」というのは、いわゆる集団語としてこのことばが使用されるという意味である。そして「若者ことば」の最後の背景要素として「境界づけ (Abgrenzung)」がある。これは、若者が「他の年齢層の者に対して境界づけを行う」(Wiese 2006: 251 頁) ために、この Kiezdeutsch を使用するということだ。

一方で Kiezdeutsch を構成するもうひとつの要素、「接触言語」を取り巻く背景として、トルコ語とドイツ語だけでなく、クルド語やアラビア語、ペルシャ語など、他の言語からの影響も受けていると Wiese (2006) は見る。さらにそれらの言語要素とは別に、「民族方言 (Ethnolekt)」と「(きちんとした形でない) 第二言語習得 (ungesteuerte Zweitspracherwerb)」がそこに要素として加わると主張している。「民族方言」について Wiese (2006) は、「特にトルコ系移民のドイツ語から発展した『トルコ人のドイツ語 (Türkendeutsch)』と関係している」(Wiese 2006: 246 頁) としている。そして「(きちんとした形でない) 第二言語習得」というのは、Kiezdeutsch として話されることばは、いわゆる「学習者言語 (Lernersprache)」と

して習得されたのではなく、教育現場から離れた場所で習得したことばであることを意味している。「第二言語習得」の前に「きちんとした形でない」とついているのは、そのためである。

Wiese はこの Kiezdeutsch を、「ドイツ語と同等の独自の言語として扱う」(Wiese 2006: 246 頁) のではなく、「ドイツ語の変種として見る」(Wiese 2006: 246 頁) という立場をとっている。以上のように、Kiezdeutsch は本来のドイツ語に、「若者ことば」と「接触言語」の要素が加わり Kiezdeutsch となったということが、このモデルから読み取ることができる。

### 3.3. Kiezdeutsch の文法的特徴

それでは実際に、Wiese (2006) が Kiezdeutsch として挙げた例文をもとに、Wiese が主張する Kiezdeutsch の文法構造と言語的特徴を見ていこう。

(6) Ich mach dich Messer. (Wiese 2006: 246 頁)

= Ich greife dich mit dem Messer an.

(俺はお前をナイフでやっつける。)

(7) Hast du U-Bahn? (同: 257 頁)

= Nimmst du die U-Bahn?

(お前地下鉄ある?)

引用文(6)は、Wiese (2006) のタイトルにもなっている文で、まず目につく特徴は *angreifen* 「攻撃する」が、単純な動詞 *machen* 「する、やる」で表されていることだ。それと同時に *Messer* 「ナイフ」につくべき定冠詞と前置詞が省略され、ことばが単純化している。Wiese (2006) によるとこの例が、論文のタイトルにもある「文法的な生産性」(grammatische Produktivität) を表しているとしている。同様に(7)の例文においても、*nehmen* 「乗る、利用する」が *haben* 「持つ」という単純な動詞に置き換えられ、*U-Bahn* 「地下鉄」につくはずの定冠詞も省かれている。

(8) Morgen ich geh Arbeitsamt. (Wiese 2006: 249 頁)

= Morgen gehe ich ins Arbeitsamt.

(明日俺職業安定所行く。)

同じく引用文(8)を見てみると、まず(6)、(7)の例と同様に、名詞に伴う定冠詞と、方向を表す前置詞が省略されている。さらにここでは、主文における定動詞第2位という文法規則から逸脱している。これも Kiezdeutsch のひとつの文法的特徴であると、Wiese (2006) は述べている。この特徴については他の言語学者が調査していくなかでも同様に観察された現象で、田中 (2011) でもそのことについて触れている。<sup>11)</sup>

(9) Ey, rockst du, lan, Alter. (Wiese 2006: 249 頁)

= Ey, du rockst, Alter!

(おい、兄ちゃん、お前ハジけてるぜ！)

そして最後の引用文(9)だが、ここでトルコ語からの影響を見ることができる。(9)の *lan* はトルコ語で「男」を表す語である。ドイツ語の若者ことばにおいて *Mann* 「おい」や *Alter* 「お前」を間投詞として使用するという言語的特徴が、多民族が接触していくなかで、移民のことばによって語が代替され使用されていることがここから分かる。この *lan* という語の使用がトルコ系移民以外の背景を持つ若者が話すドイツ語の中に入ってきたつあるということは、Wiese に限らず、既に他の言語学者の調査からも明らかになっていることである。<sup>12)</sup>

### 3.4. Kiezdeutsch の話者

では、Kiezdeutsch の話者は具体的には誰なのであろうか。Kiezdeutsch の話者について Wiese (2006) は、「(Kiezdeutsch は) トルコ系移民に限らず、移民背景を持

11) 筆者が 2010 年 3 月に Mannheim の IDS (ドイツ語研究所) にて Arnulf Deppermann 教授と面談した際に、*Ich gehe Bahnhof* 「私駅行く」のように、名詞につく冠詞と方向を表す前置詞を落とし簡略化した形のドイツ語表現が、今ではドイツ人のとりわけ若者によっても話されているという説明を受けた (田中 2011: 43 頁を参照)。

12) Keim (2002) は、ドイツ人の若者がトルコ語の *siktir lan* 「失せろ」を使用する (Keim 2002: 233 頁を参照) という例を挙げており、また Auer/Dirim (2005) による Hamburg の調査では、イラン系の少年が談話中に呼びかけの意味で、同じくトルコ語の *lan* を使用するケースが報告されてる (Auer/Dirim 2005: 21 頁を参照)。

たない者によっても標準ドイツ語と併用されている」(Wiese 2006: 251 頁)としている。また Wiese は Kiezdeutsch に興味を持った人のために、Kiezdeutsch に関するホームページを開設し、そこで例えば Kiezdeutsch の話者について次のように詳述している。

Kiezdeutsch が特別なのは、この若者ことばがさまざまな言語（そして文化）が接触することで発展したという点である。例えば Berlin の Kreuzberg のように、異なる出自や出身国のことばを持つ人々が共に生活する都市の住宅地区で発展したのである。[\(http://www.kiezdeutsch.de/wersprichtkiezdeutsch.html\)](http://www.kiezdeutsch.de/wersprichtkiezdeutsch.html)

公的に有力な意見とは逆に、この若者ことばは（例えばトルコ系の若者のような）特定の出自を持つ若者によってのみ使用されているのではなく、異なる言語や民族が接触することで発展した。 [...]したがって、Kiezdeutsch はドイツ系、そして非ドイツ系の出自を持つ若者が混ざりあったグループにおいても話される。すなわち Kiezdeutsch とは、言語的、民族的、そして文化的多様性のある住宅地区で生じた接触言語なのである。[\(http://www.kiezdeutsch.de/wersprichtkiezdeutsch.html\)](http://www.kiezdeutsch.de/wersprichtkiezdeutsch.html)

つまりこれは、ドイツ語の母語話者も Kiezdeutsch を使用しているという指摘になる。以上のことからこの Kiezdeutsch というのは、トルコ系やクルド系、アラビア系などの民族背景を持つ者たちの言語が、大都市の多民族地域で互いに接触することで交わったこと、しかしながら今ではそれぞれの民族の言語が接触したことによって新たな言語変種となり、特定の民族性を脱したことばとなったと解釈することができる。実は、この Kiezdeutsch と類似した言語現象は、ドイツ国内だけに留まらず、他の欧州諸国においても観察されている（Wiese 2006: 248 頁を参照）。そのうちのひとつがオランダの Amsterdam や Utrecht など、多民族が暮らす地域から発展した straatstaal（原義は「（街の）通りのことば」）と呼ばれる若者ことばである。<sup>13)</sup>

13) 筆者がオランダ人の友人にこの概念について聞いてみたところ、これについて既知であり、興味深い返答が得られた。曰く、このことばはトルコやモロッコ系移民のなまりであるが、tough なイメージでオランダ人の若者も使用するということである。この点から、ドイツにおける移民の言語状況とのある種の共通点が見えてくる。

Wiese は、Kiezdeutsch という概念と用語を考案するに至った経緯について、2007 年 10 月 15 日の „Spiegel Online“とのインタビューで次のように述べている。

「私は学生を言語学に熟中させる、面白いテーマを見つけなくてはならないことを自覚していた。」 [...] ただしこの－こう呼ぶことができるのだろうか－研究領域が社会的にこんなにも早く重要になるとは、Wiese がこの研究領域に初めてアプローチし近づいた 2001 年には、彼女自身予想していなかった。

(<http://www.spiegel.de/spiegel/print/d-53278255.html>)

以上の発言からも分かるように、Kiezdeutsch という概念は、もともと学生の興味を引くためのテーマとして Wiese が 2001 年頃に着想したのが始まりである。一方で Wiese は、自ら考案した Kiezdeutsch という概念がいかにポジティブに評価されるべきものであるかを、2009 年 5 月 25 日の „Südwestrundfunk“ や 2009 年 5 月 27 日の „Die Welt“ など、複数のメディアで述べている。Wiese へのインタビューを踏まえてこれらのメディアでは、Kiezdeutsch に対して例えば次のような価値づけを行っている。

この若者ことばをドイツ語の危機であるとは、この言語学者は見なしていない。Kiez-Deutsch とはむしろ、ドイツ語を豊かにするものであるようだ。

(<http://www.swr.de/international/de/-/id=233334/nid=233334/did=4888224/5mrpfk/index.html>)

ドイツ語の多様性をもたらすものと評価された Wiese による「Kiezdeutsch」は、混成言語として位置づけられた「Kanak Sprak」や「Türkendeutsch」よりも、着想の豊かさと文法的な精巧さの点で勝っているようだ。

(<http://www.welt.de/kultur/article3812587/Kiezdeutsch-bringt-auch-unsere-Sprache-voran.html>)

これらは Wiese の発言をメディアが引用しているものであるが、このように Wiese は、メディアの取材においても Kiezdeutsch の有用性を述べ、Kiezdeutsch に

対してポジティブな価値づけを行っている。

### 3.5. Kiezdeutsch の全体像

これまでの発言をもとに、Wiese が Kiezdeutsch について示した特徴づけを表 1 としてまとめた。これを見ることで、Wiese が Kiezdeutsch をどのようなものとして捉えているかが見えてくるであろう。

表 1 : Heike Wiese の構想した Kiezdeutsch の内容・話者・評価

Heike Wieselによる定義	
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 都市部の移民が多く暮らす地域で発達した若者ことばの変種。</li> <li>- 第二言語習得、民族方言、若者ことばと関連している。</li> <li>- ドイツ語の変種で、独自の言語ではない。</li> </ul>
話者	<ul style="list-style-type: none"> <li>- おもに移民背景を持つ若者。</li> <li>- しかし、ドイツ人の若者によっても話される。</li> <li>- 標準ドイツ語と併用されて用いられる。</li> </ul>
評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>- 文法的な生産性がある。</li> <li>- ドイツ語を豊かにする。</li> <li>- 着想の豊かさと文法的な精巧さ。</li> </ul>

表 1 から分かるように、Kiezdeutsch について Wiese は、若者ことば、またドイツ語の変種であると見なしている。そして話者がおもに移民背景を持つ若者で、しかしドイツ人の若者からも話され、その際に標準ドイツ語と併用されるとしている。そして最後に Wiese は Kiezdeutsch に対して、文法的な生産性があり、ドイツ語を豊かにする着想の豊かさと文法的な精巧さがあるという評価を与えている。

### 4. Kiezdeutsch という概念の拡大と曖昧化

Kiezdeutsch の概念は、その後ドイツ社会に受容されていくなかで、その評価の面でも、またその解釈の面でも変化してきている。Kiezdeutsch に関する評価と解釈の変遷を捉るために、4.1 言語学者の記述、4.2 メディアの報道、4.3 メディア受容者の解釈という 3 方向からの分析を試みてみよう。まず 4.1 において、言語学者の間でこの Kiezdeutsch という概念に対してどのような解釈と評価がなさ

れているのかを検討する。続いて 4.2 で、この Kiezdeutsch という語がどのようにメディアで用いられ、また報道されていったのかを観察する。そしてさらに 4.3において、4.2 のメディア報道をもとに、メディアを受け取る側、つまりメディア受容者が Kiezdeutsch に対してどのような解釈をし、またどのような評価を与えているのかを見していく。ここでのメディア受容者とは、Kiezdeutsch について報道したインターネット記事に対して、何かしらの意見を投稿した読者を対象とする。以上の点を明らかにすることによって、Wiese (2006) で定義づけられた Kiezdeutsch が、受容の面でどうなっているのか、また評価の面でどういう変化を遂げているのかを捉えることができるであろう。その際に、Wiese (2006) の定義と比較して、解釈と評価の面で拡大化や曖昧化が見られるかを観察する。

#### 4.1. 言語学者による記述

それではまず、言語学者による Kiezdeutsch に対する見解を見ていく。

私たちは、この変種の文法的な生産性と革新的な潜在能力を例証する実例を述べていく。教育的な観点から、Kiezdeutsch は多くの点で高い潜在能力もまた有している。学校のプロジェクトは異文化間コミュニケーションを豊かにする手助けになるであろうし、軽蔑的態度を弱めるだろう。文法の授業において、Kiezdeutsch は 10 代の子が彼ら自身のことばを分析することによって言語能力を高めるための手段となりうるので。(Paul/Freywald/Wittenberg 2009: 91 頁)

学校の授業への Kiezdeutsch の導入に関する記述は、Kiezdeutsch の話者が標準ドイツ語と Kiezdeutsch の区別がつかなくなっているのではないかという声に対するもので、Kiezdeutsch を授業に取り入れて、自らが話すことばを生徒たちに意識させることで、言語を使い分ける能力を養成できるのではないかという見解である。<sup>14)</sup> これは、Wiese (2006) と同じく Kiezdeutsch の生産性や有用性を説く主張

14) „Klett-Themendienst 37“とのインタビューにおいて、Wiese もこのことについて次のように述べている。「この若者ことばをドイツ語授業へ適切に結びつけることは、2つの理由から有意義である：もし彼らの言語慣用が文法的分析のためのテーマとしてドイツ語の授業において直面に取られ、ブローカンなドイツ語として批判されるのみでなかったら、このドイツ語は一方で多くの若者が何年もの内に発達させたネガティブな言語的自己像に反した方向へと導く。他方で若者は、Kiezdeutsch に関する学校のプロジェクトを通して文法的なテーマへの親しみを感じ、より大きな関心を発達させうる (Greiffenstern 2007: 15-16 頁)」。

であるが、ここで注意すべきはこの論文の著者が Heike Wiese の教え子たちであるという点だ。Wiese の教え子たちが Kiezdeutsch を論文で扱い、Kiezdeutsch の豊かさや潜在能力を伝えようとしている様子がここから伺うことができる。この点である種、Wiese と教え子たちで Kiezdeutsch をドイツ社会に広め、認知させようとする一種の政策的とさえ呼べる動きが見て取れる。<sup>15)</sup>

一方で Neuland (2008) のように、Wiese の取り組みを疑問視する言語学者もいる。Neuland (2008) は、「Wiese (2006) が主張するこのテーゼは、„Ich mach dich Messer“型の文法的構造の言語的生産性を証明したことに基づいている。このテーゼは、明らかにさらなる立証と経験に基づいた証明が必要である」(Neuland 2008: 159 頁) といった、「客観的」立場から見解を寄せた。この Neuland (2008) の発言には、同意できる点があると筆者は考える。Wiese (2006) が示した引用例だけでは Kiezdeutsch の「生産性」や「ドイツ語を豊かにする」という説を実証するには情報量が不足しており、Neuland (2008) が述べたように、今後も「生産性」を実証できる充分な量の例を示すことが必要であると、筆者自身も考える。このような Wiese や教え子たちによる一連の Kiezdeutsch に対する価値づけが、後に Kiezdeutsch に関する他者の解釈に何かしらの影響を与えていていることが推測される。

#### 4.2. メディアにおける報道

次に、メディア報道（新聞、雑誌およびインターネット記事）における Kiezdeutsch に対する解釈、および Kiezdeutsch の評価づけを見ていきたい。

文は本来のドイツ語の文法あるいは語が認識できないほどまでに短縮されている。言語学者はしかしながら、このなかに独自の若者ことばを見出している。

(<http://www.swr.de/international/de/-/id=233334/nid=233334/did=4888224/5mrpfk/index.html>)

15) 同じく Wiese のもとで学んだ Ines Urban も、2007 年に „„Lassma“ Weltmeisterschaft machen – eine grammatische Untersuchung zum Kiezdeutsch“ というタイトルで修士論文を提出している。

多くの外国人の若者だけでなく、ドイツ人の若者もこのスラングを話す。このスラングはほぼ外国語の語彙、また略語から構成されており、概念を寄せ合わせ、むだなことばをその間に散乱させ、冠詞を無視し、新たな語を作り出す。どのグループも、独自のことばを持っている。(Greiffenstern 2007: 15 頁)

まず Kiezdeutsch に対する解釈だが、上述のように Kiezdeutsch の若者ことばとしての背景のみを取り上げる記述や、ドイツ語母語話者も用いるスラング、あるいはグループ語として報道する記述が見られる。それを踏まえ Kiezdeutsch に関してメディア報道では、以下のような評価を与えてている。まずは 2009 年 5 月 26 日の „Berliner Zeitung“ の記事では、ベルリン＝ブランデンブルク学術協会会長の Günter Stock とインタビューが行われ、彼の以下のような見解が紹介されている。

ドイツ語の将来について、彼は心配していない。「言語とは活気ある要素で、発展し続ける。」 Stock は、ドイツ語が多く新たな影響や速い変遷によって貧困になることはないと確信している。

(<http://www.berlinonline.de/berliner-zeitung/berlin/128531/index.php?fromrss>)

このように、ことばとはそもそも発展し続けるものであり、Kiezdeutsch がドイツ語を貧困にするという考え方をしていないという記述が見受けられる。一方で、2007 年 9 月 1 日の „Focus Schule Online“ の報道には、次のような記述を見ることができる。

ことばを用いて遊ぶことは、常に創造力と革新の歓びを示している。

([http://www.focus.de/schule/lernen/bildung-red-isch-deutsch-oda-was\\_aid\\_222259.html](http://www.focus.de/schule/lernen/bildung-red-isch-deutsch-oda-was_aid_222259.html))

この引用文から、Kiezdeutsch とは若者たちの創造力を養うことばで、Kiezdeutsch を用いてことば遊びをすることは問題ではないという見方をしていることが分かる。これは、直接的あるいは間接的に、Kiezdeutsch に対して肯定的な評価を与えて報道している例である。

ただし他面、実際に移民の子どもが多く通う学校の教育者や、ドイツ語教育に

携わる Goethe-Institut の理事長である Jutta Limbach の声を取り入れ報道する例もある。そこでは、「移民のドイツ語」と Kiezdeutsch が同一のものとして扱われ、ドイツ語の将来について以下のような否定的見解が示されている。

(Kreuzberg の) 小学校の教員は、生徒の 5 分の 1 程度しか授業について来られないないと嘆いている。残りの生徒はドイツ語に問題があるようだ。 [...] これが (子どもたちの) 危険な発展ではないと言うのであろうか。

(<http://www.berlinonline.de/berliner-zeitung/berlin/128531/index.php?fromrss>)

最近になり、再び Limbach はドイツ語が危機に瀕していることに対して危惧の念を抱いた。彼女が言うには、大都市の居住地の多くにおいて標準ドイツ語も、両親のことば、例えばトルコ語も熟達しない移民背景を持つ子の数が増加しているようだ。(<http://www.spiegel.de/spiegel/print/d-53278255.html>)

#### 4.3. メディア受容者の解釈

最後に、メディア受容者（読者）のレベルにおける Kiezdeutsch に対する解釈について見ていくたい。今回の分析において対象としたのは、2007 年 9 月 1 日の „Focus Schule Online“ のインターネット記事に対して寄せられた、46 件の読者投稿である。まずメディア受容者の Kiezdeutsch に対する評価を引用する。「Kiezdeutsch は簡略化した形式で物事を表現し、より速く本題に運ぶことができる」(Focus Schule Online) というように、Kiezdeutsch がより速いコミュニケーションを可能にするという評価を与えていたり、「若者たちは楽しむために常に独自のことばを創作してきたし、そこに問題はない」(Focus Schule Online) と、Kiezdeutsch が若者によってつくられたことばであると捉えた上で、そこに問題はないとする意見が見られる。この時点で、Kiezdeutsch がメディア受容者によりポジティブに拡大解釈されていることが分かる。そして Kiezdeutsch に対する解釈としては、話者がむしろドイツ人の若者の方が多いのではという投稿が見られる。例えばそれは、「15、16 歳の時に自分も Kiezdeutsch で話していたが、これはより早くコミュニケーションをするためだ。その点で、チャットのことばと似ている」(Focus Schule Online) といった解釈である。またさらに、「ドイツ人の若者の方が、トルコ系の同級生よ

りもこのことばを話す」(Focus Schule Online) といったように、話者がむしろドイツ人の若者の方が多いのではという投稿や、「Gymnasium に通う子どもたちも、チャットをする時にはそのように書く」(Focus Schule Online) というように、もはや社会層ないし教育レベルとは関係なく Gymnasium に通う者によってもチャットのことばとして使われるという指摘もが見られる。ここで、Wiese (2006) の定義には見られない「チャットのことば」や「社会層」、「教育レベル」等の用語が登場し、解釈の面で曖昧化が生じていることが分かる。

以上のことから、メディア受容者にとって Kiezdeutsch がどのように解釈され評価されているかを、次の表 2 のようにまとめることができる。

表 2：メディア受容者による Kiezdeutsch の定義（内容・話者・評価）

メディア受容者の定義	
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>- より速いコミュニケーションのためのことば。</li> <li>- その点でチャットのことばと似ている。</li> <li>- 若者たちがつくりだしたことば。</li> </ul>
話者	<ul style="list-style-type: none"> <li>- ドイツ人の若者の方がより頻繁に使用する。</li> <li>- Gymnasium に通う子も、チャットの時には <i>Kiezdeutsch</i> を使う。</li> </ul>
評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>- より速く簡潔に表現することを可能にした。</li> <li>- <i>Kiezdeutsch</i> を話すことは問題ではない。</li> </ul>

表 2 から、メディア受容者にとって Kiezdeutsch とは、まず速いコミュニケーションを可能にするチャットのことばのようなもので、より迅速で簡潔な表現を可能にするという評価が与えられているということが見えてくる。Kiezdeutsch の話者はむしろドイツ人の若者の方が多いという指摘すらあったことになる。もちろんこのメディア受容者による解釈は、あくまでひとつの傾向でしかない。しかし この限りにおいても、Wiese によって与えられた Kiezdeutsch に対する「生産性」、「ドイツ語を豊かにする」という評価が大きく取り上げられ、4.3 で見られたようなポジティブな見解を生む要因のひとつとなったということが推測される。

## 5. 結論

以上のように、言語学者、メディア報道、メディア受容者とも、「トルコ系移民のドイツ語」が今では民族性を脱したものであると認識しており、その認識が社会において普及していくプロセスを跡づけることができた。「トルコ系移民のドイツ語」の概念について曖昧さ、多面化、誤解が生じることになったひとつの原因は、メディアが「トルコ系移民のドイツ語」を様式化したり、概念の拡大解釈を行ったりしたことにあると言える。そして、このようなメディア報道やメディア受容者における混乱ぶりは、Wiese (2006) が論文のなかで *Ich mach dich Messer.* のような簡略な、ある程度規則性のある形での言語表現のような例を示し、Kiezdeutsch は「文法的な生産性」があると説いたことがひとつの大きな原因となったものと思われる。つまり、特定の言語学者が「トルコ系移民のドイツ語」に対し極めて肯定的な評価を与えて論を展開したことが、評価面での拡大解釈を誘発したと推測される。言語学者の役割ということを考えると、Wiese は言語学者として事物を記述するという本来の役割を超えて、評価を与えるという行為を行ったわけである。もし Wiese がこの Kiezdeutsch に対して評価を与えることなく言語学的な記述のみを行っていたら、今回観察できた Kiezdeutsch に関する評価、解釈とは異なるものがメディア報道やメディア受容者に観察されたかもしれない。

## 参考文献

- Androutsopoulos, Jannis (2001): „Ultra korregd Alder!“ Zur medialen Stilisierung und Popularisierung von ‚Türkendeutsch‘. In: *Deutsche Sprache* 4/2001, S. 321-339.
- Androutsopoulos, Jannis (2011): Die Erfindung des Ethnolekts. In: Franceschini, Rita/Haubrichs, Wolfgang (Hg.): *Ethnizität. Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik*. Heft 164. Stuttgart/Weimar: J.B. Metzler, S. 93-121.
- Auer, Peter (2003): ‚Türkenslang‘. Ein jugendsprachlicher Ethnolekt des Deutschen und seine Transformationen. In: Häckl-Buhöfer, Anne (Hg.): *Spracherwerb und Lebensalter*. Tübingen: Francke, S. 255-264.
- Auer, Peter/Dirim, İnci (2005): Zum Gebrauch türkischer Routinen bei Hamburger Jugendlichen nicht-türkischer Herkunft. In: Hinnenkamp, Volker/Meng, Katharina

- (Hg.): *Sprachgrenzen überspringen. Sprachliche Hybridität und polykulturelles Selbstverständnis*. Tübingen: G. Narr, S. 19-49.
- Byrd, Brenna Reinhart (2009): Media Representations of Turkish-German and Hip-Hop Language as a Uniform Ethnolect. Proceedings of the Seventeenth Annual Symposium About Language and Society – Austin. April 10-11, 2009. In: *Texas Linguistic Forum* 53: S. 72-78.
- Dirim, Inci/Auer, Peter (2004): *Türkisch sprechen nicht nur die Türken*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- DUDEN (1999): *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in zehn Bänden*. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Freidank, Michael (2001): *Wem ist dem geilste Tuss in Land? Märchen auf kanakischem und so.* Frankfurt am Main: Eichborn.
- Greiffenstern, Janna von (2007): „Krass reden“ im Deutschunterricht. In: Klugkist, Thomas (Hg.): *Klett-Themendienst 37*. Stuttgart: Klett-Verlag. S. 15-16.
- 浜崎桂子 (2005) 「移民たちの『声』を書きとめる試み」[『神戸外大論叢』第 56 号、11-25 頁] .
- „Ich mach dich Messer“. („Berliner Zeitung“, <http://www.berlinonline.de/berliner-zeitung/berlin/128531/index.php?fromrss>, zugegriffen am 22.8.2011).
- Jugendsprache: Forscherin: „Kiez-Deutsch“ ist eigene Sprache. („SWR.de“, <http://www.swr.de/international/de/-/id=233334/nid=233334/did=4888224/5mrpfk/index.html>, zugegriffen am 4.11.2011).
- Keim, Inken (2002): Sozial-kulturelle Selbstdefinition und sozialer Stil: Junge Deutsch-Türkinnen im Gespräch. In: Keim, Inken/Schütte, Wilfried (Hg.): *Soziale Welten und kommunikative Stile: Festschrift für Werner Kallmeyer zum 60. Geburtstag*. Tübingen: G. Narr, S. 233-259.
- Kiezdeutsch: Ein Infoportal zu Jugendsprache in urbanen Wohngebieten mit hohem Migrantanteil: Informationen für Interessierte und Handreichungen für Schulen. (<http://kiezdeutsch.de/>, zugegriffen am 4.11.2011).
- 小西友七、南出康世 (編) (2002) 『ジーニアス英和辞典 [第3版]』 大修館書店。
- 国松孝二 (編集代表) (1998) 『独和大辞典 [第2版]』 小学館。

- Neuland, Eva (2008): *Jugendsprache. Eine Einführung*. Tübingen/Basel: Francke.
- Paul, Kerstin/Freywald, Ulrike/Wittenberg, Eva (2009): „Kiezdeutsch goes school“ – A multi-ethnic variety of German from an educational perspective. In: *Journal of Linguistic and Intercultural Education* 2. S. 91-113.
- 田中翔太 (2011) 「トルコ系移民のドイツ語,,Kanak Sprak“は誰のもの?—言語変種の混交、そして越境—」[『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 15 号、31-52 頁] .
- Trojanowski, Sven: Bildung: Red isch Deutsch oda was? („Focus Schule Online“, [http://www.focus.de/schule/lernen/bildung-red-isch-deutsch-oda-was\\_aid\\_222259.html](http://www.focus.de/schule/lernen/bildung-red-isch-deutsch-oda-was_aid_222259.html), zugegriffen am 4.11.2011).
- Verena, Araghi: Sprache: Lass ma krass reden!- Die Auswirkungen von „Kiez-Sprache“ auf das Standarddeutsche. („Spiegel Online“, <http://www.spiegel.de/spiegel/print/d-53278255.html>, zugegriffen am 4.11.2011).
- Werner, Hendrik: „Isch mach dich Messer“ - Kiezdeutsch bringt auch unsere Sprache voran. („Welt Online“, <http://www.welt.de/kultur/article3812587/Kiezdeutsch-bringt-auch-unsere-Sprache-voran.html>, zugegriffen am 4.11.2011).
- Wiese, Heike (2006): „Ich mach dich Messer“: Grammatische Produktivität in Kiez-Sprache („Kanak Sprak“). In: Grewendorf, Günther/von Stechow, Arnim (Hg.): *Linguistische Berichte Heft 207*. Hamburg: Helmut Buske Verlag, S. 245-273.
- Zaimoglu, Feridun (1995): *Kanak Sprak: 24 Mißtöne vom Rande der Gesellschaft*. Berlin: Rotbuch Verlag GmbH.

(たなか・しょうた 学習院大学大学院人文科学研究科博士前期課程)

## De-Ethnisierung des Deutschen der Türkischstämmigen

Zur Rolle von Sprachwissenschaftlern und Medien bei der Anerkennung  
dieser Sprachvarietät

SHOTA TANAKA

Ursprünglich begann die Erforschung des Deutschen der Türkischstämmigen in den 1970er Jahren. Damals wurde diese Sprache nicht nur mit dem Deutschen der Türkischstämmigen, sondern auch mit dem Deutschen der anderen Migranten zusammen als *Gastarbeiterdeutsch* bezeichnet. Bis jetzt wird der Begriff des Deutschen der Türkischstämmigen u.a. als *Türkendeutsch*, *Kanak Sprak*, *Stadtteil-Sprache*, *Türkenslang*, *Kiez-deutsch* (*Kiez-Sprache*) gekennzeichnet. Jedoch sind die Gegenstände, Inhalte oder Bereiche der jeweiligen Begriffe mehr oder weniger verschieden. Der Begriff *Kanak Sprak*, der durch Feridun Zaimoglu, einen türkischstämmigen Autor, im Buch „*Kanak Sprak: 24 Mißtöne vom Rande der Gesellschaft*“ (1995) definiert wurde, ist heute bekannt. Zaimoglu benutzte mit Absicht das negative Wort *Kanake* und fokussierte damit auf türkischstämmige Jugendliche und deren Sprache. Sein Ziel war es, dass diese Jugendlichen wieder ein positives Selbstbild bekommen sollen. Jedoch machten sich Komiker über das Deutsch der Türkischstämmigen in TV-Medien lustig und stilisierten dabei diese Sprache; so entwickelte sich eine negative Stereotypisierung.

Der vorliegende Aufsatz fokussiert sich aus diesen vielen Begriffen, die das Deutsch der Türkischstämmigen bezeichnen, vor allem auf den Begriff *Kiezdeutsch*, der durch Heike Wiese in „„Ich mach dich Messer“: Grammatische Produktivität in Kiez-Sprache („Kanak Sprak“)“ (2006) definiert wurde. Dieser Begriff erlaubte eine erweiterte und übertriebene Interpretation. Wiese verwendet das Wort *Kiez*, das umgangssprachlich „Rotlicht-, Amüsier- und Vergnügungsviertel“ heißt, und definierte diese Sprache folgendermaßen: *Kiezdeutsch* ist „eine jugendsprachliche Varietät, die sich in urbänen Wohnvierteln mit hohem Migrantenanteil ausgebildet hat“ (Wiese 2006: 247);

diese Sprache habe auch Beziehungen zum Ethnolekt, dem Zweitspracherwerb und der Jugendsprache. Ein Satz wie *Ich mach dich Messer* hat laut Wiese „grammatische Produktivität“, dem *Kiezdeutsch*, das nun keine bestimmte Ethnizität mehr hat, wurde von Wiese die „Bereicherung der deutschen Sprache“ oder der „Erfindungsreichtum und grammatischen Finesse“ zugeschrieben; darüber wurde auch in den Medien berichtet.

Um die Ausbreitung der Bewertung und der Interpretation dieses Begriffs genauer zu verstehen, versuche ich eine Analyse in drei Richtungen, und zwar aus Sicht der (1) Sprachwissenschaftler, der (2) Medien-Berichte und der (3) Medien-Empfänger. Es wurde klar, dass in der Sicht (1) durch Wiese und ihre Mitarbeiterinnen die Produktivität des Begriffs genannt und versucht wird, den Begriff zu verbreiten und in der deutschen Gesellschaft anerkennen zu lassen. In der Sicht (2) konnte man sehen, dass nur über einen Teil der Elemente dieses Begriffs, wie z.B. „Jugendsprache“ oder „Gruppensprache“, in den Medien berichtet und (in-)direkterweise eine positive Bewertung gegeben wird. In der Sicht (3) waren positive Interpretationen zu erkennen, wie z.B., dass die Medien-Empfänger *Kiezdeutsch* als die Sprache ansehen, die eine schnelle und vereinfachte Kommunikation ermöglicht und die eher auch von Deutschen gesprochen wird. Dies ist zwar nur eine Tendenz, aber es ist klar zu sehen, dass positive Bewertungen von Wiese, wie z.B. „Produktivität“, solche erweiterten Interpretationen von Medien-Berichten und -Empfängern erlaubten.

Als Fazit lässt sich sagen, dass in allen drei Phasen *Kiezdeutsch* nicht mehr als Ethnolekt anerkannt wird. Dass Medien die Sprache der Türkischstämmigen stilisierten oder Begriffe erweitert interpretierten, verursachten Missverständnis und Verwirrung der Begriffe. In Bezug auf die Rolle der Sprachwissenschaftler wäre sicherlich eine andere Bewertung zu sehen gewesen, wenn Wiese als Sprachwissenschaftlerin dieses Phänomen ohne jegliche Einschätzung nur beschrieben hätte.

